

合理的な林業人を アカデミーが育てる

岐阜県立森林文化アカデミー

横井 秀一

●2011年 アカデミーが変わる

森林文化アカデミーは、来年度から両科の構成とカリキュラムが変わります。クリエイター科は現在の5研究会が4講座に再編され、エンジニア科は3コースが1コースになります。この改変で、クリエイター科に『林業再生講座』を設け*、エンジニア科を現在の『森のコース』を基軸にしたカリキュラムとするところに、新しい林業界を担う人材をアカデミーが送り出すのだという意志が表れています。

では、どんな人材が新しい林業界に必要なのでしょうか。私は、ちゃんとした根拠に基づいて、きちんと考えて仕事ができる人、すなわち、合理的な仕事ができる人材がこれからの林業界には欠かせないと思っています。

●合理的な仕事が林業を変える

それというのも、今の林業界を見ると、合理的でない仕事がたくさん目につくからです。林業が自立した産業として成熟するには、林業の様々な場面で繰り広げられる仕事をもっと合理的にすることが必要です。ここでいう合理的な仕事とは、仕事の合理化—新しい設備や技術の導入、管理体制や組織の再編成などによって、労働生産性を高めること—とは違います。それはもっと根元的なもので、文字通り「理に合った仕事をする」ということです。「理」とは、「理」(物事の道理;理由;理論)のことです。世の中には、様々な理があります。例えば、自然の理。林業が自然相手の仕事である限り、それは最大限に尊重されなければなりません。林業が経済活動であるためには、経済の理に則っていなければなりません。それと同時に、社会の理に反するものであってなりません。人がその活動を担うことを考えれば、人の行動の理も重要であることがわかります。様々な面で理に適った仕事、それが合理的な仕事です。

合理的ということ、少し具体的に考えてみましょう。

例として、複層林施業をみてみます(自分の専門分野が造林なので)。実は、複層林造成を目的に樹下植栽が行われた現場の多くで、せっかく植えた下木が衰弱したり枯れたりしています。これは、樹木が育つには相応な光が必要であるという自然の理を軽視した結果です。下木が育たず、苗木代や作業経費がパーになれば、経済の理に合わないこ

とをしたことは自明です。下木が育つように、本来ならまだ伐らなくてもいい上木を伐ることにしたのなら、これはこれで経済の理に反します。上木を収穫するときに下木を傷つけてしまったら、あるいは、そうならないよう注意を払うことで伐倒・集材の経費が高くなったなら、これも経済の理に合わないことでしょう。こうしてみると(ざっと見ただけですが)、複層林施業が理に適っているとは言い難いことがわかります。そうであるなら、こうした理に適わない施業法を選択しないことが、合理的な仕事をすることになります。それにより、無駄な補助金(元は国民の税金)を使わなくて済むという社会の道理も立つわけです。

個々の作業についても、同じように考えることができます。ある林を間伐すると思ってください。なぜその木を伐るとよいのか、間伐後の林がどうなるのか(何十年か後にどれくらいの大きさの木になるか、それまでに風や雪で倒れないか、今後の間伐や主伐でどれくらいの収穫が期待できるかなど)、伐採木を収穫するとしたらどうやって出せばいいのか—例えばこうしたことをきちんと考えて選木するのが合理的な仕事といえます。また、実際に立木を伐倒するときには、何かしらの根拠を持って伐倒方向を決めるでしょう。その根拠が理に適っているなら、それは合理的な仕事をしているといえるのです。

●合理的な仕事ができる能力を身につける

林業では(というよりどんな仕事でも)、様々な場面で、合理的な仕事が展開されなくてはなりません。これは現場だけの話ではなく、行政についても言えることです。それには、次の3つが必要だと考えています。

- ① 合理的に物事を運ぶことが大切だと気づくこと。
- ② 合理的なものの見方・考え方ができるようになること。
- ③ 物事の理を知ること。

アカデミーで林業を学ぶ学生には、講義や実習、見学をとおして、合理的な仕事ができる能力を身に付けてほしいと願っています。もちろん学生だけでなく、短期技術研修などを受講される方々にも、こうしたことを伝えていくつもりです。

※クリエイター科には、他に『山村づくり講座』『木造建築講座』『ものづくり講座』が開設されます。